

フィールド風

(現場)からの

宮田守男

報道では、新型コロナウイルス感染症拡大で各地が閑散との情報だが、通行車両の県外ナンバーが多い事が気になってしまふ。本来な

ら観光地ではうれしいことだが、早く終息して活気ある故郷になってほしいものだ。
総務省が8月の住民基本台帳に基づく人口動態調査の数値を発表した。総人口は過去最大の約48万人の減、長野県内の65歳以上の割合は32.03%と前年より0.38%上昇した。白馬村は外国人が712人減少し、減少数では全国の町村で2番目に多かった。

テレビで海外に住む多くの日本人からの現地報道に驚きを覚えてしまふ。世界各地で多くの日本人が活躍する実態を知る事ができた。世界を舞台に活躍の可能性にチャレンジする人達にエールを送りたい。
全国有料ホーム協会が「敬老の日」に合わせて公募した「シルバー川柳」の入選作が発表された。「密です」と言われてみたい頭頂部、「名を呼ばれ誰も立たなきゃたぶんオレ」、「お互いに返事をするが動かないな」など思わず上手いなと笑えてしまう作品が目白押し。だが認知症は他人事ではない。

認知症患者の受け入れ 対応が今後の課題だ

世界保健機構が世界全体で認知症患者が2019年時点で1億500万人に上ったとの試算を発表した。今後も増え続け、30年には7800万人、50年には1億3900万人と、19年の約2.5倍になると予測した。日本国内でも制度など社会全体で患者や家族を支える仕組みの拡充が急務となっていくのだろう。
コロナ禍が収まれば、外国人観光客も認知症を患う訪日客が増え続けていくと予測できる。訪日観光客ばかりでなく、日本人も含めた認知症患者を受け入れる観光地の在り方を今からでも模索しなくては、厳しい観光に生き残っていけないだろう。
知人の元NHK職員加藤和郎さんからの情報では、漢字学者の白川静さんの「常用字の「医」は「仁(かくじ)がまえ・隠す事を示す符号) + 矢」を合わせ、矢を中に入れて隠す事を示している。つまり「医」の中にある「矢」は悪霊をほうり力を持つ。文字が生まれたころ



9月中旬、久しぶりの秋晴れ。太陽の有り難さを感じた。

は、病は悪霊のしわざとされ、かけ声をかけながら矢をうち、その力で悪霊を退散させることが治療であった。じつじつとコロナウ

イルス対策には、改めて「医」の力を信じ続けたいと思う。
(信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上)